

越川 陽介 氏 学位審査結果の要旨

主査：福永 幹彦

副査：中邨 智之、日下 博文

近年治療薬の進歩で、統合失調症患者の治療予後は改善し社会復帰を治療ゴールとするまでになった。しかし服薬中断からの再発もあるため、近年ではアドヒアランス改善を目指して持効性注射製剤（long-acting injection）が用いられるようになった。本邦で用いることのできる持効性注射製剤は 3 剤あるが、そのうちの 2 剤、2 週間に一度の注射で血漿中薬物濃度を維持できる Risperidone (RLAI: Ris-LAI)、4 週間に一度の注射で血漿中薬物濃度を維持できる Paliperidone palmitate (PP: Pal-LAI) の 2 剤の認知機能、社会機能に与える影響について比較検討した。Ris-LAI にて 2 か月以上治療中の患者 30 名を Ris-LAI 継続群と Pal-LAI 切替群とにランダムに割り付け、その後の 6 か月間治療し治療前後で認知機能（BACS）と社会機能（SFS）を測定した。結果、Pal-LAI 切替群は Ris-LAI 継続群に比べ BACS-J の下位尺度である注意と情報処理が、また SFS の総合得点と下位尺度の自立-能力、自立-実行が有意に改善した。この差は 2 剤の薬理学的特性によるものと、治療間隔が伸びることによる自己効力感の上昇により生じたものと考えられた。それぞれの薬剤の特性を活かすことで、治療病期に応じた薬剤の使い分けができる可能性が示唆された。